

インターネット利用における 不快・恐怖体験（嫌な思い）に関する調査研究

Research which investigated the situation of an inordinate fear,
dread and unpleasant experience through the internet in use

大谷 良光*・浅田 豊**・斉藤奈緒子***

Yoshimitsu OTANI*・Yutaka ASADA**・Naoko SAITO***

論文要旨

本研究では、青森県におけるフィーチャーフォン、スマートフォン等の所持率を明らかにし、ネット利用における不快・恐怖（嫌な思い）体験の実態を把握するため、高校1年生を対象としてアンケート調査を行った。その結果、①不快・恐怖体験（嫌な思い）や被害を受けたことがある人の率がネット利用者の15.1%であった点、②被害としては自分への誹謗中傷、有害情報へのアクセス、個人情報流出、なりすましなどが認められる点、③お金に関するトラブルとして、身に覚えのないメールでの請求等が認められる点、④不快に感じた体験として、チェーンメールを受け取る等が見られる点、⑤被害を受けた後の対応として、96.2%が「無視をする」、としており「ネット被害免疫」が形成されてきている点、⑥「インターネットで知り合った人と実際に会ったこと」について、いわゆるONライン上のみでの友達を有する生徒のうち16.3%が実際に会っており、女子の割合が相対的に高い点、などが明らかになった。

キーワード：端末（機器）所持、不快・恐怖体験（嫌な思い）、インターネット利用時間、フィルタリング、交流・出会い

1 はじめに

携帯型端末の普及は社会的に、加速度的に進んでいる。年代を問わず、インターネットを利用する機会も増加していることが伺える今日である。そういった中、情報共有や発信・表現の上での利便性とは、同時存在即ちコインの表と裏のような関係にある事象が、ネットいじめや被害・トラブルの増加・深刻化の問題である^{1)～7)}。この問題は現代においてまさに多様化しつつあり、ネットいじめを内包した個人への誹謗中傷は日々多くの人を苦しめている。また社会状況を反映し、犯罪者集団からの子どもをターゲットとした架空請求詐欺、出会い系有害情報等への誘引は、ケータイの機能・コンテンツを換えつつ増加しつつある。さらに掲示板は、青森県内高校生の利用率が低下し都市

並みになったが、依然問題が多く発生している。子どもたちは、どのようにしてこのようなリスクを回避できるのか、その基盤となる判断力は養われているのかを、我々社会の大人が真剣に議論する時が来ている。被害の未然防止・早期発見・再発防止に関する教育や施策の体系化・充実と徹底が急務であるといえよう。

本件に関係する先行調査では、子どものフィーチャーフォン（従来の携帯電話）等の利用に関する調査（文部科学省：平成21年）の中で、①フィルタリングをしている子どもはしていない子どもに比べ、携帯電話に関するトラブルを経験した割合が低い点、②携帯電話をよく使う子どもは就寝時間など生活面への影響が見られる点、③フィーチャーフォンの利用に関して家庭でのルールがある場合、子どもは利用マナー

* 弘前大学教育学部技術教育講座

Department of Technology Education, Faculty of Education, Hirosaki University.

** 弘前大学教育学部非常勤講師、青森県立保健大学准教授

A part-time lecturer of Faculty of Education, Hirosaki University. Aomori University of Health and Welfare (associate professor)

*** 弘前大学教育学部学生 弘大ネットパトロール隊

A Undergraduate Student of Faculty of Education, Hirosaki University. Hirosaki University Internet-patrol Party.

を身に付けている割合が多い点等が明らかになっている。また青少年のインターネット利用環境実態調査（内閣府：平成22年）では、①フィーチャーフォンやパソコンでインターネットを使っていると回答した青少年のうち26.5%が「チェーンメールが送られてきた」と回答している点、②21年度と比べ半減はしているものの、「プロフやゲームサイトで知り合った人とやり取りしたことがある」高校生女子の割合は22年度で11.7%である点等が明らかになっている^{8)~9)}。

こういった背景と並行し、弘前大学教育学部「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクト及び同ネットパトロール隊調査部ではこれまでに第一に、フィーチャーフォン販売店舗や高校生を対象とした調査を実施した。この調査では、青少年インターネット環境整備法施行後6ヵ月経過した時点でフィルタリング設定、メール受信拒否設定、ネットいじめの方法等に対するフィーチャーフォン販売員の知識等を明らかにする目的で青森県内の当該販売店に訪問調査を行なった。その結果、フィルタリング加入の重要性等をユーザーに説明した販売員は約5割、ネットいじめの方法の認識は低いなどの結果が判明した。第二に、青森県内高校生のフィーチャーフォン購入状況やフィルタリング設定状況等を調査したところ、フィルタリング利用率が約4割と低いこと等が判明した、といった実情が明らかになってきた。第三に、ゲーム機によるネット利用の実態を明らかにする目的で、青森県内の子どもたち及び保護者に対し質問紙調査を行なった結果、①ゲーム機によるインターネット利用状況に関し、保護者と子どもの間に意識の差異が認められ、保護者が子どものインターネット利用の実態を十分に把握できていない点、②ゲーム機のフィルタリング、ペアレンタルコントロールに関し、その認知度、利用、機能設定の状況について低い点、などが明らかになった^{10)~12)}。また同時に、①フィーチャーフォン販売店舗への研修強化、知識習得、ユーザーへの詳細かつ丁寧な説明、フィルタリングサービスの改善等の要望、②中高生や保護者、教育関係者等へフィルタリングサービス利用の重要性や問題解決の必要性等を訴える緊急アピールを公表する、等の現実的な対応策の提言・公開も行ってきた。

これらの研究・社会的介入実践成果を踏まえ、その延長線上にある本研究では、以上の問題意識に基づき、青森県におけるフィーチャーフォン、スマートフォン、パソコン、インターネットにつながる端末の所持率を明らかにし、一昨年の高校2年生を対象に

行った不快・恐怖体験調査との比較を踏まえ、ネット利用における不快・恐怖（嫌な思い）体験の実態を把握するため、青森県において多くの子ども達がケータイを所持する高校1年生を対象にアンケート調査を行った。

2 調査方法・概略

本調査では、対象とする地域を青森県内6行政区とし、各地区の高校で実施した。学校抽出・紹介にあたっては青森県教育委員会の協力を得た。また各地区では、市街地と農業・漁業地域での子ども数、男女数が均等になるように配慮した。調査実施期間は、2012年（平成24年）1月である。

調査対象者は青森県内公立高校6校の1年生1,091名である。調査内容は、(1) フィーチャーフォン・スマートフォン・パソコンの所持について、(2) インターネットの利用状況について、(3) SNSサイトの利用状況について、(4) フィルタリングサービス・メール受信拒否設定について、(5) フィーチャーフォンの利用による不快・恐怖（被害）体験について、(6) インターネット上での交流についての6項目である。

有効回答数は703名、有効回答率は64.4%であった。今回の調査では、後のデータ作成のために全て適切に回答できているもののみを有効回答として扱った。そのため、ある一部分でも記入に誤りのあるものは無効としたために有効回答数が低くなった。用語について、「ケータイ」は、フィーチャーフォン（従来の携帯電話）とスマートフォンを含めたモバイル端末を表示し、「フィーチャーフォン」は従来の携帯電話に相当する用語として区別して用いた。アンケート回答時には、用語の規定は記述していないが、データの分析の過程で、区別が子ども達の認識と一致していると理解した。

3 調査結果と考察

(1) 端末所持状況について

表1-1から表1-9までは、端末（機器）の所持状況並びに機器を利用する際の家庭内での決まりごとに関し、まとめたものである。ケータイの所持率は98.2%であった。自分専用のパソコン所持率は19.2%であるが、家族との共有になると61.6%が所持している。スマートフォンはこの時点で1割の生徒が所持し、男子の所持率が高い。また、フィーチャーフォン、スマートフォン、個人用パソコンとも高校1年生

表１－１ 端末（機器）の所持状況
【ケータイ（フィーチャーフォン＋スマートフォン）】

	所持している		有効回答数
	人数	割合%	
男	342	97.2	352
女	348	99.1	351
計	690	98.2	703

表１－２ 端末（機器）の所持状況
【フィーチャーフォン】

	所持している		有効回答数
	人数	割合%	
男	299	84.9	352
女	336	95.7	351
計	635	90.3	703

表１－３ 端末を持ち始めた時期（フィーチャーフォン）

全体	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	高１
635	1	1	5	13	18	19	30	44	92	412
	0.2%	0.2%	0.8%	2.0%	2.8%	3.0%	4.7%	6.9%	14.5%	64.9%

表１－４ 端末（機器）の所持状況
【スマートフォン】

	所持している		有効回答数
	人数	割合%	
男	50	14.2	352
女	16	4.6	351
計	66	9.4	703

表１－５ 端末を持ち始めた時期【スマートフォン】

全体	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	高１
66	0	0	0	0	0	0	1	1	8	56
	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1.5%	1.5%	12.1%	84.8%

表１－６ 端末（機器）の所持状況
【パソコン（本人専用）】

	所持している		有効回答数
	人数	割合%	
男	72	20.5	352
女	63	17.9	351
計	135	19.2	703

表１－７ 端末を持ち始めた時期【パソコン（本人専用）】

全体	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	高１
135	3	0	6	2	3	1	22	26	16	56
	2.2%	0%	4.4%	1.5%	2.2%	0.7%	16.3%	19.3%	11.9%	41.5%

表１－８ 端末（機器）の所持状況
【パソコン（家族との共有）】

	所持している		有効回答数
	人数	割合%	
男	205	58.2	352
女	228	65.0	351
計	433	61.6	703

表１－９ 端末使用時の家庭内での決まりごとの有無（複数回答可）

全体	利用料金制限	食事中×	勉強中×	使用時間制限	フィルタリング	学校では電源切	受信拒否設定	その他	ルールなし
696	56	226	63	16	338	181	43	11	185
	8.0%	32.2%	9.1%	2.3%	48.5%	26.0%	6.2%	1.6%	26.6%

※分母を「何らかの端末を持っている人数（持っていない7人を除く696人）」としている。

で購入している率が最も高く、中学までの所持率が全国平均よりかなり低い。

また、各家庭での決まり事の中で最も多かったのはフィルタリングを設定することであり、48.5%を占めていた。しかし一方で26.6%は、ルールを特に設定せず、有害情報に対してノーガードの端末を利用している。

(2) インターネットの利用状況について

表2-1から表2-8までは、インターネットの利用端末、利用サイト、利用時間についてまとめたものである。利用のうち、最も多かったものがケータイでのインターネット利用で、89.3%（約9割）を占める。次いで、パソコンの利用が合計で78.1%（約8割）と、パソコンもケータイと同じく多数利用されて

いた。これは、動画の利用増に伴う変化と思われる。また、動画サイトの利用が79.9%（ネット利用者の約8割）と最も高く、次いで72.1%がSNSサイトの利用となっている。平成22年1月に、弘前大学教育学部「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクトが青森県内の高校2年生を対象にして実施した、本研究と関連する「嫌な思い」調査では、SNSサイトの利用が最も高かった（74.9%）ため、2年間でサイトの利用は大きく変わったといえる。また、動画サイトは男子が女子より10.3%、SNSサイトも11.3%高い。さらに、フィーチャーフォン、スマートフォン、パソコン、それぞれの利用で最も高いのが「1時間以上3時間未満」の利用者である。3時間以上の利用をしているのも携帯電話、スマートフォンにおいても約3割を超えている。

表2-1 インターネットの利用状況

全体	利用する	利用しない
703	691	12
	98.3%	1.7%

表2-2 インターネットを利用する際に使う主な端末（複数回答可）

ケータイ						パソコン						ネット利 用者数
		フィーチャーフォン		スマートフォン				専 用		家族共用		
人数	%	人数	%	数	%	数	%	人数	%	人数	%	
617	89.3	551	79.7	66	9.6	540	78.1	113	16.3	427	61.8	691

※分母はインターネットを利用する691人としている。

表2-3 インターネットを利用する際に使用するサイト（使用したことがある場合を含む）（複数回答可）

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	431	211	498	456	552	112	28
	62.4%	30.5%	72.1%	66.0%	79.9%	16.2%	4.1%

※分母はインターネットを利用する691人としている。

表2-4 動画サイトの利用

	利用している		ネットと利用者数
	人数	割合%	
男	291	85.1	342
女	261	74.8	349
計	552	79.9	691

表2-5 SNSサイトの利用

	利用している		ネット利用者数
	人数	割合%	
男	267	78.1	342
女	231	66.8	349
計	498	72.1	691

表2-6 インターネットの平均利用時間【フィーチャーフォン】

全体	30分以下	30分以上 1時間未満	1時間以上 3時間未満	3時間以上 6時間未満	6時間以上
551	73	79	210	128	61
	13.2%	14.3%	38.1%	23.2%	11.1%

※分母は携帯電話でインターネットを利用する際、「フィーチャーフォンを利用している」551人としている。

表 2-7 インターネットの平均利用時間【スマートフォン】

全体	30分以下	30分以上 1時間未満	1時間以上 3時間未満	3時間以上 6時間未満	6時間以上
66	3	8	30	18	7
	4.5%	12.1%	45.5%	27.3%	10.6%

※分母はインターネットを利用する際、「スマートフォンを利用している」66人としている。

表 2-8 インターネットの平均利用時間【パソコン】

全体	30分以下	30分以上 1時間未満	1時間以上 3時間未満	3時間以上 6時間未満	6時間以上
484	126	108	172	66	12
	26.0%	22.3%	35.5%	13.6%	2.5%

※分母はインターネットを利用する際「自分専用もしくは共有、学校、施設を利用している」人数を足した484人としている。

(3) SNS サイトの利用状況

表 3-1-1 から表 3-5 までは、SNS サイトの利用状況、ゲーム利用、課金状況、課金に関する保護者の認知について、まとめたものである。サイトについては、グリーが77.7%とトップで、次がモバゲーの71.1%で、大人が多く活用しているフェイスブックは5.4%のみである。

2012年5月になりマスコミで取り上げられた「ゲーム上でのコンプリートガチャ」等の課金問題については、SNS サイト内でゲームを利用する割合が、SNS サイト利用者の87.6%（ネット利用者の63.1%）であった。課金して利用している者が、ゲーム利用者の18.6%（ネット利用者の11.7%）であった。

お金の支払い方法については、ケータイ料金に上乗せ方式が87.7%で、支払っている事実を知っている保護者は82.7%であった。

(4) フィルタリングサービス、メール受信拒否設定について

表 4-1 から表 4-4 までは、フィルタリングやメール受信拒否の設定状況について、まとめたものである。まず「フィーチャーフォンをお持ちの方はフィルタリングサービスを現在利用していますか。」という問いに対しては、65.5%が設定しており、最も高い割合を占めている。しかし18.7%は設定しておらず、利用しているか分からない状況に9.4%がある。また、

表 3-1-1 SNSサイトの利用状況(GRRE)

	利用している		SNS 利用者数
	人数	割合%	
男	222	83.1	267
女	165	71.4	231
計	387	77.7	498

表 3-1-2 SNSサイトの利用状況(mobage)

	利用している		SNS利用者数
	人数	割合%	
男	200	74.9	267
女	154	66.7	231
計	354	71.1	498

表 3-2 SNSサイト内でのゲーム利用

	利用している		SNS利用者数
	人数	割合%	
男	249	93.3	267
女	187	81.0	231
計	436	87.6	498

表 3-3 ゲームやアバターにお金を使っているかどうか

	課金している		SNS利用者数
	人数	割合%	
男	56	21.0	267
女	25	10.8	231
計	81	16.3	498

表 3-4 お金の支払い方法(複数回答可)

全体	ケータイ料金と	Web money	その他
81	71	14	3
	87.7%	17.3%	3.7%

※分母は表 3-3 の項目で「はい」と答えた81人としている。インターネット利用者の10.3%がケータイ料金に上乗せしてはらっている。

表 3-5 お金を使っていることについての保護者の認知

全体	知っている	知らない
81	67	14
	82.7%	17.3%

※分母は表 3-3 の項目で「はい」と答えた81人としている。

「スマートフォンをお持ちの方はフィルタリングサービスを現在利用していますか。」という問いに対しては、フィーチャーフォンとは異なり、設定率は34.8%と低く、51.2%は設定していない。さらに、「18歳未満が使用する携帯電話にはフィルタリングサービスを設定しなければならないと法律で決まっていることを知っていますか。」という問いについては、「知っている」と30.0%が答えたものの、43.5%が「知らない」と答えていた。しかし、フィーチャーフォンのフィルタリング設定が65.5%であるということは、購入時に販売店が「法律」に準じて説明義務を果たしていると思われる。そして、メール受信拒否設定については、「設定している」が32.8%、「していない」が51.2%で、約半数は利用していない状況であった。

(5) 不快・恐怖体験（嫌な思い）、被害状況について

表5-1から表5-12までは、嫌な思いに関する被害状況の詳細、メールを介しての不快な体験、被害後の対応、ネット利用時間との関係性をまとめたものである。まず、「不快・恐怖体験（嫌な思い）や被害を受けたことがありますか。また、それはどのような体験・被害ですか。」という問いに対しては、ネット利用者の15.1%が「ある」、86.7%が「ない」と答

えている。「ある」の中で最も多いのが、「SNS、プロフィール・ブログ・ホームページからの自分の誹謗中傷（2.2%、2.0%）」、「メール、動画サイトでのお金に関するトラブル（2.0%、1.3%）」、「メールや動画サイト、プロフィール・ブログ・ホームページで意図しないのに有害情報にアクセスされた（1.4%、1.4%、1.2%）」、「プロフィール・ブログ・ホームページ、SNSでの個人情報の流出（1.9%、0.9%）」、「掲示板やメールで自分になりすまして書き込みされた（1.2%、0.9%）」であり、「お金に関するトラブル」等で動画サイトが登場したことが特徴的である。

また、お金に関するトラブルでは、お金に関するトラブルがあったという回答者のうち、「身に覚えのないメールでの請求」、「有料サイトにリンクされお金を請求された」がそれぞれ46.3%、39.0%と多いことが分かった。これはネット利用者との割合では、それぞれ2.7%、2.3%である。さらに、ネット利用者で「メールで恐怖や被害までとは思わないが、少々不快に感じた体験」を聞いたところ、「正確性のないチェーンメールを受け取る」が50.7%、「見知らぬ相手からメールを受け取る」が38.8%、「出会い系有害情報サイトからのメール」が32.4%と多く見られた。そして、「不快・恐怖体験（嫌な思い）や被害を受けたことがある方で、その後どのような対応をとりましたか。」と

表4-1 フィーチャーフォンを持っている場合の、フィルタリングサービス利用状況

全体	利用している	利用していない	利用していたが解除	分らない
635	416	119	40	60
	65.5%	18.7%	6.3%	9.4%

※分母は「ケータイを持っている」635人としている。

表4-2 スマートフォンを持っている場合の、フィルタリングサービス利用状況

全体	利用している	利用していない	利用していたが解除	分らない
66	23	32	4	7
	34.8%	48.5%	6.1%	10.6%

※分母は「スマートフォンを持っている」66人としている。

表4-3 「18歳未満が使用するフィーチャーフォンにはフィルタリングサービスを設定しなければならない」ことの認知

全体	知っている	なんとなく	知らない
690	207	183	300
	30.0%	26.5%	43.5%

※分母はこの問を回答した690人としている。

表4-4 現在の、メール受信拒否設定の利用状況

全体	利用している	利用していない	利用していたが解除	分らない
690	226	353	21	90
	32.8%	51.2%	3.0%	13.0%

※分母はこの問を回答した690人としている。

いう問いに対しては、体験のあった生徒の、96.2%が「無視をする」、19.2%が「親や先生に相談」という対応がとれており、「ネット被害免疫」が形成されてきていると思われる。

また、ネットの利用時間と不快恐怖（被害）体験と

の関係をみると、「1時間未満」が17.9%、「1時間以上3時間未満」が40.5%、「3時間以上」41.7%と「1時間未満」と「1時間以上」に不快恐怖（被害）体験率が2分されることがわかった。

表5-1 不快・恐怖体験(嫌な思い)の被害状況

	受けたことがある		ネット 利用者数
	人数	割合%	
男	49	14.3	342
女	59	16.9	349
計	104	15.1	691

※分母はインターネットを利用していると答えた691人としている。

表5-2 被害における「自分の誹謗中傷」

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	14 2.0%	10 1.4%	15 2.2%	7 1.0%	1 0.1%	0 0%	5 0.7%

※複数回答のため合計が15.1%になっていない(表5-2～表5-8)。

表5-3 被害における「家族、友人の誹謗中傷」

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	7 1.1%	5 0.7%	5 0.7%	1 0.1%	0 0%	0 0%	1 0.1%

表5-4 被害における「自分になりすまして書き込みがされた」こと

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	5 0.7%	8 1.2%	3 0.4%	6 0.9%	0 0%	0 0%	9 1.3%

表5-5 被害における「自分の個人情報の流出」

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	13 1.9%	2 0.3%	6 0.9%	2 0.3%	0 0%	1 0.1%	3 0.4%

表5-6 被害における「家族や友人の個人情報の流出」

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	1 0.1%	1 0.1%	1 0.1%	1 0.1%	0 0%	1 0.1%	1 0.1%

表5-7 被害における「意図しないのに有害情報にアクセス」したこと

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	8 1.2%	5 0.7%	2 0.3%	10 1.4%	10 1.4%	0 0%	7 1.0%

表5-8 被害における「お金に関するトラブル」

全体	プロフ、ブログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
691	4 0.6%	4 0.6%	5 0.7%	14 2.0%	9 1.3%	0 0%	8 1.2%

表5-9 お金に関するトラブルの詳細(複数回答可)

全体	ネットオークション 上でのトラブル	身に覚えのないメー ルでお金を請求	有料サイトにとんで しまいお金を請求	その他
41	1	19	16	5
	2.4%	46.3%	39.0%	12.2%

※分母はこの間を回答した41人としている。

表5-10 メールでの「不快な体験」(複数回答可)

全体	自分の名を語った メール	見知らぬ相手から メール	身に覚えのない サイトから料金請求	出会い系有害 情報からのメール
691 (ネット利用者数)	14	268	82	224
	2.0%	38.8%	11.9%	32.4%
	自分の誹謗中傷の チェーンメール	友人の誹謗中傷 チェーンメール	正確性のない チェーンメール	友人から脅迫的な 内容のメール
	6	17	350	11
	0.9%	2.5%	50.7%	1.6%
	携帯電話会社を 装ったメール	その他	特に嫌な思いなし	
	22	10	181	
	3.2%	1.4%	26.2%	

※メール利用者は456人であるが、本質問項目では「全員に聞く」項目として設定したためメール利用者が増えている。そのため、分母をインターネット利用者数とした。

表5-11 不快・恐怖体験(嫌な思い)や被害をうけた後の対応

全体	無視した	お金を払って しまった	親や先生に相談した	警察や消費者 センターに相談した	その他
104	100	0	20	0	7
	96.2%	0%	19.2%	0%	6.7%

※分母は被害状況に関し「はい」と答えた104人としている。

表5-12 SNSサイト利用者でネット友だちになったSNS運営会社ごとの比較

mobage	GREE	Ameba	facebook	mixi	その他
232	244	147	22	176	11
27.9%	29.3%	17.7%	2.6%	21.2%	1.3%

*分母は見知らぬ人と友達になった(または交流したこと)がある人数(表6-1参照)

表5-13 フィルタリングの設定と不快恐怖体験の関係

フィルタリングの設定の有無		不快恐怖体験	
	人数	被害人数	率
設定あり	416	62	15.0
なし	119	21	17.6

表5-14 フィーチャーフォンからのネット利用時間と不快・恐怖体験(嫌な思い)の関係

被害あり

全体	A群	B群	C群
84	15	34	35
	17.9%	40.5%	41.7%

被害なし

全体	A群	B群	C群
467	137	176	154
	29.3%	37.7%	33.0%

※A群は〈30分以下〉+〈30分以上1時間未満〉、B群は〈1時間以上3時間未満〉、C群は〈3時間以上6時間未満〉+〈6時間以上〉である。

(6) インターネットを介した出会いについて

表6-1から表6-4までは、インターネットを介しての出会いの状況や問題点について、まとめたものである。まず、「インターネット上で見知らぬ人と友達になった（または交流した）ことはありますか。」という問いに対しては、全体の約半数以上（57.6%）があると答えている。この点において、男女間には差が無かった。次に、「それはどのようなサイト内においてですか。」という問いに対しては、SNS サイトが77.9%と最も高く、次にプロフ・プログ・ホームページの24.1%、また、利用者が急増した動画サイトでも5.5%が利用していた。さらに、「インターネット上で知り合った人と実際に会ったことはありますか。」という

問いに対しては、いわゆる ON ライン上のみでの友達を有する生徒のうち、16.3%が実際に会っていた。注視すべきは、男女間の差で、男子11.7%に対して女子は20.8%と差が9.1%と顕著であった。誘い出しによる女子の被害報道が多いことがこの数字で理解できる。

また、「実際に会ったことで身の危険を感じたことはありますか。」という問いに対しては、会ったことのある生徒の中で、4.6%にあたる生徒が身の危険を感じていた。ネット利用者（691人）の0.43%なり、青森県の高校生総数（42260人－2011年度）に換算すると182人となる。危険の内容については、一人のみ「精神的苦痛」と書かれていたが、他は記載されていなかった。

表6-1 インターネット上で見知らぬ人と友達になった（または交流したこと）経験

全体	はい	いいえ
691	398	305
	57.6%	44.1%

※分母はインターネットを利用していると答えた691人としている。

表6-2 出会いの経路となったサイト

全体	プロフ、プログ、ホームページ	掲示板	SNS	メール	動画サイト	ツイッター	その他
398	96	50	310	36	22	53	28
	24.1%	12.6%	77.9%	9.0%	5.5%	13.3%	7.0%

※分母は表6-1で「はい」と答えた398人としている。

表6-3 インターネット上で知り合った人と実際に会った経験

	ある（OFF ライン友達）		ネット上での ON ライン友達数
	人数	割合%	
男	23	11.7	196
女	42	20.8	202
計	65	9.4	398

表6-4 実際に会ったことで身の危険を感じたことの有無

全体	はい	いいえ
65	3	62
	4.6%	95.4%

※分母は表6-3で「はい」と答えた65人としている。これは、ネット利用者（691人）の0.43%にあたり、青森県の高校生総数に換算すると170人になる。

4 結論と提言

(1) 端末所持状況について

今回の調査から、ほとんどの生徒はケータイ（フィーチャーフォンとスマートフォン）を所持し、持ち始める学年も高校入学と同時に急激に高くなることが改めて明らかになった。全国平均は高校2年生で95.9%であり、ほぼ一致している。自分専用や家族と共有のパソコンを所持している生徒もいるが、イン

ターネットを利用する端末からも分かるように携帯型（モバイル）の端末がやはり生徒の中では主であると言えるだろう。また現在は、スマートフォンの所持率は9.4%という割合ではあったが、今日の状況から考えると、今後はフィーチャーフォンからスマートフォンへの移り変わりが確実に視されている。インターネットを利用する端末の「その他」としてゲーム機を挙げた生徒もいるため、携帯型の端末におけるインター

ネット利用はやはりこれからも、注目していかなければならない。

フィーチャーフォン、スマートフォン、パソコンを所持している生徒に使う際の家庭内での決まり事も聞いたが、48.5%が「フィルタリングを設定する」ことを決まり事としている一方で26.6%は「決まり事は特に決めていない」と回答している。保護者がいかに自分の子どもに対し意識を持って使わせているかが重要なポイントとなるだろう。

(2) インターネットの利用状況について

インターネットを利用するサイトとしては、著者らが予想していた SNS サイト利用よりも動画サイト利用が上回る結果となった。動画サイトは視聴のみならず、アカウントを取得すれば投稿することもできる。今回はどのような目的で動画サイトを利用しているか、といったところまでは問わなかったものの、動画サイトには未成年の生徒たちにはふさわしくない有害な動画もたくさんあるため、視聴、投稿における動画サイト利用については今後の啓発活動の一環としても視野にいれていかなければならないと考える。

インターネットの利用時間に関しては、フィーチャーフォン、スマートフォン、パソコンと全てが1時間以上3時間未満という時間が最も多いことが分かった。注目すべき点としては、フィーチャーフォン、スマートフォンにおける時間で、3時間以上使っている割合が3割を超えていることである。高校1年生であり、部活動などもしているとすると、帰宅後家で過ごす時間の中で3時間以上もネットに繋げる時間があるだろうか。つまりは、睡眠時間を削り夜更かしをしていると予想される。そして授業中眠くなるという悪循環に陥るのではないだろうか。また、これがフィーチャーフォン、スマートフォン、パソコン、と一つの端末を通しての利用だけでなく、例えば家族との共有のパソコンで動画サイトを利用し、自分の部屋に行きケータイやパソコンでブログなどを利用しているという使い方も考えられる。

(3) SNS サイトの利用状況

利用している SNS サイトに関しては、我々パトロール隊で監視探索活動している mobage よりも GREE がわずかではあるが上回る結果となった。今後の弘前大学「ネット・ケータイ問題」研究プロジェクトの活動も見直していかなければならない。また、サイト内の課金については、マスコミの事件報道と比較すると

SNS のサイト利用者の16.3%と以外に少なく思われた。多数の生徒は自身で金銭的なトラブルをしっかりと避けることができていると言えるかもしれない。しかし、コンプガチャ等の射幸心をあおるネットゲームのワナにはめられ、課金を支払っている生徒がネット利用者の1割いる事実は重要である。彼／彼女らは「被害者」と言う意識はないため、井上トシユキの述べたように「ユーザーは、自分達が牧場に囲い込まれて毛を刈られる順番を待つ羊だと認識する必要がある」との認識で啓発する必要がある。

(4) フィルタリングサービス、メール受信拒否設定について

フィルタリングに関してはケータイ所持者中の65.5%の生徒が利用していた。2009年1月に同じく高校1年生を対象に行った調査では41.7%の利用率であったことから、法的整備の進展に伴い、普及の促進が見られる。しかし残りの34.5%（利用していない18.7%、解除した6.3%、分からない9.4%）の存在や、青少年インターネット環境整備法の認知度（知っている30.0%、なんとなく知っていた26.5%、知らない43.5%）に基づけば、生徒自身へのフィルタリングの浸透は必ずしも十分ではないと考えられる。フィルタリングをすれば完璧とは言いが、スマートフォン所持者における設定率の低さ（34.8%）からも子どもたちを守る1つの手だてとして今後きちんと活用するよう啓発することが必要である。

(5) 不快・恐怖体験（嫌な思い）、被害状況と被害を受けた後の対応について

不快・恐怖体験（嫌な思い）被害状況の設問からは、その意識を持った生徒が15.1%との結果になった。このようにネット上での様々な体験があることは事実であり、この現状をしっかりと把握しておかなければならない。また全回答者に聞いたメールに関しての不快のみ体験で、特に多いものが50.7%を占めた「正確性ないチェーンメール」であり、一つの学校で集中的に多かった。学校内の友人同士で出回っていたのだろう。また次いで「見知らぬ相手からメール」が38.8%を占め、子ども達がメールで体験した嫌な思いが明らかになった。

被害を受けた後の対応では（表5-11参照）、「無視」が96.2%、「親や先生に相談」が19.2%と高く、「ネット被害免疫」が形成されてきていると思われる。

(6) インターネットを介した出会いについて

今回の調査では、特にインターネットを介した出会いという点が課題であると思われる。ネットを利用する約半数以上（57.6%）がネット上で見知らぬ人と友達になった（または交流したこと）があり、その中でも16.3%が実際に出会っていた。出会での男女別の比較では、端末所持状況等に特に大きな差はないものの、注視すべき点としてサイト利用での違いが挙げられる。サイトを利用する際、利用率の高かった「動画サイト」「SNS」を男女間比較として用いたが、動画サイト利用、SNS利用は男子の方が多い傾向にある（表2-3、表2-5参照）。また、インターネット上での見知らぬ相手との交流に関しては大きな差はないが出会いになると女子が男子の約2倍であった（表6-3参照）。同世代の男子に比べ交流が多いということは、年上または年下などの違う年代の人たちと交流しているのではないかということが予想される。交流の場として使われているサイトとしてはGREE、mobage、mixiが占めている（表5-12参照）。

(7) 不快恐怖体験とフィルタリングの設定、携帯電話の利用時間との関係

我々パトロール隊での監視・探索活動における一つの指標となる、フィルタリングと不快・恐怖体験の関係については、「フィルタリングを設定しているから被害に遭いにくい」と今回の結果から言い切ることは難しい（表5-13参照）。また、利用時間と不快・恐怖体験の関係では、B群、C群共に差はないが、携帯電話の被害ありがA群を境に大きく差がひらく（表5-14参照）。時間との関連については今後重要視していかなければならない問題であるといえる。

以上の検討を基に、次のような提言を打ち出すことができる。

①多くの生徒は、各種の「情報」や不快恐怖体験を通して「学習」し、ケータイ被害への「免疫」を付けてきていると思われるが、一定数の生徒の不快恐怖体験の実態は深刻である。データからみると実際に身の危険を感じる等の被害に遭遇した生徒もいる。また、メール依存症とその予備群、ウェブ依存症と思われる生徒も一定数存在していた。したがってケータイ所持前、所持後のケータイリスク教育や情報モラル教育、生き方の指導が必要である。

②ネットいじめを内包した個人への誹謗中傷の実態は深刻であり、いじめ指導、人権教育と連携させた、

指導の強化と詳細な実態の把握が喫緊である。

③社会状況を反映し犯罪者集団からの子どもをターゲットとした架空請求詐欺、出会い系有害情報等への誘引は、ケータイの機能・コンテンツを換えつつ増加するものと思われ、事例を通したリスクの啓発と被害にあった場合の対応の仕方について教育しておく必要がある。

④掲示板の県内高校生の利用率は、2年前の調査と比べて変わらなかった（ネット利用者の3割）が、誹謗中傷の書き込みは大きく減じた。これは、我々や教育関係者のネットパトロールの成果と思われる。しかし、他サイトでの誹謗中傷、新たに動画サイトでの書き込みが予想されるので、子どもたちの不快恐怖体験を防ぐためにも社会的機関による「ネットパトロール・見守り」活動が今後も必要である。

⑤自らを防御する、フィルタリング設定率は65.5%と全国平均や前回調査より大幅に向上した。また、設定後、解除した生徒も6.3%と低く（表4-1参照）、これは啓発活動により「付けていることが身を守る」という認識が増えたからであろうと思われる。しかし、まだ設定率は高いとは言えない。その役割と生徒の要望に対応した各種方法を生徒ともに保護者にも啓発する必要がある。

⑥少なくない高校生はケータイでの不快恐怖を体験しつつ「ネット被害免疫」をつけていると思われ、また、社会的判断力の育ってきている高校生も多数いることから、高校生自身の取り組みを促し、このパワーで中学生にも働きかけていくという方略が求められる。例えば、高校内に「生徒によるネット見守り隊や相談コーナー」を設け、この組織と弘大ネットパトロール隊が連携して、高校内での啓発活動や、校区の中学校や小学校への出前授業や交流事業を行うなどが考えられる。

5 注及び引用・参考文献

- 1) 堀田龍也編著『事例で学ぶNETモラル：教室で誰でもできる情報モラル教育』三省堂、2006年。
- 2) 渋井哲也『学校裏サイト 気をつけよう！ケータイ中毒 第2巻』汐文社、2008年。
- 3) 藤川大祐『本当に怖い「ケータイ依存」から我が子を救う「親と子のルール」：最新ケータイトラブルの実例と解決策』主婦の友社、2009年。
- 4) 加納寛子、加藤良平『ケータイ不安：子どもをリスクから守る15の知恵著』日本放送出版協会、2008年。
- 5) 今一生『大人の知らない子どもたち：ネット、ケータイ文化が子どもを変えた』学事出版、2004年。

- 6) 安心ネットづくり促進協議会スマートフォンにおける無線LAN及びアプリ経由のインターネット利用に関する作業部会『報告書「青少年保護・バイ・デザイン及び利用者のインターネット・リテラシー向上に向けて」』2012年。
- 7) 独立行政法人情報処理推進機構技術本部 セキュリティセンター：『IPA 対策のしおりシリーズ (8) スマートフォンのセキュリティ対策のしおり』2012年。
- 8) 文部科学省『子どもの携帯電話利用に関する調査』2009年。
- 9) 内閣府『青少年のインターネット利用環境実態調査』2010年。
- 10) 大谷良光、加川志保、本間史祥「子どもと保護者に対する携帯電話販売説明の訪問調査～フィルタリング・メール受信拒否と店員の問題意識～」『弘前大学教育学部紀要』103号、2010年、85－94頁。
- 11) 大谷良光、本間史祥、加川志保「高校生の『ケータイ被害』予防措置状況と有害情報意識～ケータイ高1プロブレム～」『弘前大学教育学部紀要』103号、2010年、95－104頁。
- 12) 大谷良光、浅田豊、加賀谷悠「小・中学生のゲーム機によるネット利用の実態調査と比較研究：青森県市街地域と農業・漁業地域、全国（内閣府2011年調査）との比較」『弘前大学教育学部紀要』107号、2012年、83－94頁。

(2012. 8. 20 受理)